

月刊

軽音楽部

発行：特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
配布：全国2,040校の高等学校軽音楽部



第36回 全国高等学校文化連盟研究大会 三重大会

令和6年12月5日・6日 四日市市文化会館



全国約4,800校の 高校に軽音楽部を!

※現在、軽音楽部があるのは2,042校です（令和6年11月1日）

軽音楽部の諸活動を通して
若者の成長を応援しています

第36回 全国高等学校文化連盟研究大会三重大会 特別号

軽音楽部支援活動の現在と今後の展望
次世代に向けて「軽音楽部 2.0」を考える
高校生活はただの3年間じゃない
生徒主体で行う部活動で得られるもの
心を1つに仲間と取り組む素敵な活動

三谷佳之	NPO 法人全国学校軽音楽部協会 理事長
辻 伸介	NPO 法人全国学校軽音楽部協会 副理事長
森崎忠彦	愛知県高等学校文化連盟 前事務局長
羽佐田透一	愛知県高等学校文化連盟 事務局長
村松正敏	愛知県立瀬戸工科高等学校 学校長 愛知県高等学校文化連盟軽音楽専門部 会長

特定非営利活動法人（NPO法人）
全国学校軽音楽部協会
Japan Association of School Light Music Club



軽音楽部に関する
コンシェルジュです。
どんな事でもお気軽に
ご相談ください。



部活動を考える

軽音楽部支援活動の 現在と今後の展望

三谷佳之

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会 理事長

今を生きる若者たちは日本だけでなく、世界の未来を担う存在です。私たちは軽音楽部での活動を通して、若者の健全な育成を支援することで、将来的に彼らを担い手とする、より良い社会の実現を目指すことを目的に設立しました。私たちは全国の高等学校をはじめ、中学校や大学の軽音楽部の普及・発展を願い、活動しています。今回は、その一端をご紹介します。

青少年の人材育成への寄与

当協会では、高等学校を中心とした「部活動」としての軽音楽部」の支援活動を行なっており、関東・中部・近畿北陸地方を対象にした「高等学校軽音楽コンテスト」の開催をはじめ、情報誌「月刊 軽音楽部」の発行、複数の高校を集めた「合同演奏会」や各種セミナーを定期的に開催しています。さらに、昨年度はオリジナル楽曲を広く募集し、応募のあったすべての楽曲に専門家からのアドバイスももらえ、今後の

参考にすることができ、「全国高等学校軽音楽部オリジナルソング・グランプリ」の開催をはじめ、石川県白山市にある白峰地区で「合同演奏会+社会見学」を実施。地元の方々に演奏を楽しんでいただくなど、新しい取り組みもスタートしました。

これらのイベントや演奏会、講習会等の根底にあるのは、私たちは部活動としての軽音楽部を対象にしているため、演奏がうまいか、そうでないかではなく、「青少年を育成する」という観点です。ギターがうまく弾けたり、バンドのアンサンブルがまとまっている…といった要素の前に、これらの取り組みが、いかに青少年の人格形成や将来の社会の担い手である人材の育成につながるかを重視しています。そのため、大会や合同演奏会等を催し、単に演奏を披露する場を作るだけでなく、上下左右に活動の幅を広げ、いかに高校生の人格形成や教養を深める一助になるか、世間一般の方々から現在の軽音楽部の様子を見ていただくかを考へ、取り組んでいます。

授業を広げていく取り組み

コンテストの開催を通じて、軽音楽部（バンド）の頂点を目指す場を作ることよりも、当協会では、様々な取り組みで軽音楽部の裾野を広げ、世間一般への認知拡大を目指す部分も大切にしています。例えば、小学生や中学生を対象にしたイベントの開催です。今夏に開催する「音楽教室」では、音楽（ミュージック）に焦点を当てたのではなく、「学」という字を入れているとおり、「音（サウンド）」に注目しています。「どうして音は聞こえるんだろう?」「マイクローフオンの構造は、どうなっているんだろう?」「スピーカーって何?」といった初歩の疑問を小学生にわかりやすいように伝えるなど、

こういった部分から音楽や楽器に興味を持ってもらうべく、今夏より始動します。これまでの「STEM教育」と呼ばれている教育観に「(ART) / 芸術」が加わり、「STEAM教育」として注目されているなど、教育現場においても「芸術文化」を学ぶことが人格形成や教養を深めることにつながる…とされています。今夏の「音楽教室」は夏休み期間中の実施になるため、小中学生の「自由研究」や「探究学習」の一環としての参加を期待しています。初回の今回は、京都府の舞鶴市にご協力いただきました。市内の小中学校の生徒にチラシを配布したほか、地元の方々にもご参加いただけるように案内をするなど、軽音楽部員だけでなく、「音楽」に関心を寄せてくださる方々を集めた会にしたいと考え、準備を進めています。

音楽や芸術に国境はない

もう一つの新たな取り組みが「高等学校軽音楽文化祭 国際大会」の開催です。「音楽に国境はない」と言われますが、部活動として取り組む軽音楽部の演奏（音楽）を世界に広げていこう、というのが今回の国際大会です。歴史や文化の地である京都府の中でも、「海の京都」と呼ばれている舞鶴市との共催で開催する運びとなりました。第1回大会では、中国のコンテストである「BAND CHINA」のグランプリバンドと準グランプリバンドが来日します。日本からは当協会が主催する「高等学校軽音楽コンテスト 関東大会・中部大会・近畿北陸大会」のグランプリ校（バンド）や「全国高等学校軽音楽部オリジ

ナルソング・グランプリ」の優秀校、開催地である舞鶴市を代表して市内の高校軽音楽部や元且に発災した「令和6年度 能登半島地震」からの復興を応援するべく、復興応援枠として石川県金沢市の高校軽音楽部が参加します。また、単に演奏を披露し合うだけでなく、学校や部活動、地域、自国の話を紹介するプレゼンテーションの時間を設けています。他者・他校・他国の文化を学び、音楽を通じた異文化交流を図ることを目的としていることから、大会の名称を「高等学校軽音楽文化祭」としました。今回の開催実績をもとに中国をはじめ、世界各国に協力を要請し、アプローチしていきますので、第2回大会では、さらに各国からの参加があることに期待しています。

軽音楽部での諸活動を通じて、「ポータブルスキル」を磨くことができる

<p>意思伝達 コミュニケーション</p> <p>バンドはメンバー同士で様々なことを相談して活動していきます。自分の意見を伝える力、相手の意見を聞く力が育ちます</p> 	<p>連帯意識 / 協働 チームワーク</p> <p>バンドは共同作業です。少人数でやり遂げる連帯感やチームの一員としての責任感が身につく、達成感による成長があります</p> 
<p>創意工夫 / 創造力 クリエイティビティ</p> <p>軽音楽部ではオリジナル楽曲を創作したり、既存曲を自分たちの演奏にするため、自ら作り出す力が育ちます</p> 	<p>顧客志向 / 顧客満足 エンターテインメント</p> <p>軽音楽部の活動の多くはライブ演奏です。自分たちの演奏を聴衆に楽しんでもらうための総合的な表現力が身につきます</p> 



なぜ音は聞こえる?

音の速さ

マイクの仕組み

音と映像

音の3要素

音に触ろう

いろいろな効果音

小・中学生向けに音や電気、音響の仕組みを優しく解説します。保護者や一般の方の参加も大歓迎! この夏休みは眼に見えない音について学びましょう。

夏休み! 自由研究 / 探究学習

音学教室

2024 8.21 WED 13:00-14:30

会場: 舞鶴市総合文化会館大ホール
 解説: NPO 法人全国学校軽音楽部協会

入場無料

お問い合わせ 特定非営利活動法人 全国学校軽音楽部協会
 TEL: 045-913-0901 info@ksokyo.org



NPO 法人 全国学校軽音楽部協会

関東・中部・近畿北陸大会、中国 BAND CHINA の入賞バンドが
この夏、舞鶴にやってくる!

第1回 高等学校軽音楽文化祭 国際大会

8.22 THU 9:00-12:30

会場: 舞鶴市総合文化会館大ホール

入場無料

主催: 特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
 協賛: 公益財団法人がけはし芸術文化振興財団
 共催: 舞鶴市

次世代に向けて 「軽音楽部2.0」を考へる

辻 伸介

特定非営利活動法人全国学校軽音楽部協会
副理事長

ここ数十年の間で、軽音楽部を取り巻く環境は大きく変わっています。世間的にはかなり市民権を得てきたようにも思いますが、一方でまだネガティブな印象を持たれている方がいることも事実です。軽音楽部は「部活動」として相応しくないのでしょうか…。今、青年期を迎えた軽音楽部は次のフェーズに入ろうとしています。当協会では、それを「軽音楽部2.0」として提唱しています。

軽音楽部発展の理由

マンガやアニメ、ゲームなどがサブカルチャーから日本を代表する文化となる中で、かつては限られた人たちだけが行っていた「バンド」も、すっかり若者文化の中に定着してきています。

30年ほど前から、日本の各地で軽音楽部が盛り上がりつつありますが、ほとんどはバンドや楽器の経験がある顧問の先生方が生徒たちの声を受けてひと肌脱いだ…というケースが多かったようです。

お話を聞いたときに、軽音楽部への理解が進んでいなかった当時のご苦労は大変なものであつたらうと推察します。

個人的には、2009年から放映されたアニメ「けいおん!」の影響も大きかったと思います。「空気系」と呼ばれる、女子高生のゆったりとした生活を描く中で軽音楽部は、それまでの男臭くマニアックなイメージを「変えました」。現在では、軽音楽部の比率は8割近くが女子生徒です。

また、軽音楽部に必要な電気/電子楽器・機材が、この数十年で大きく進化したことも軽音楽部人気の推進力となっています。インターネット、スマートフォンやタブレットの普及、デジタル化は、低コスト高機能、軽量&コンパクト化が進み、かつてはとも手が出なかつた楽器や機材も購入しやすくなりました。

軽音楽部の魅力と教育的効果

軽音楽部は、チームワーク、コミュニケーション、クリエイティブティ、エン

ターテイメントを学ぶ機会に溢れています。どれも、これからの日本人像に求められるスキルです。集団活動や他人との絆を大事にしなが、自分のアイデアや意見をもち、相手に伝わりやすい方法を考へてゆく…。文部科学省の提唱する、思考力、判断力、表現力といった「生きる力」を養うことができます。

今後の日本では、今までのような記憶型・受動型タイプではなく、自ら考え、周囲の人たちと協力し合いながら実行していきける力が求められています。運動部と文化部の良いところを持つハイブリッド性が軽音楽部の魅力であり、ポピュラーミュージック（軽音楽）の楽しさでもあります。

よく誤解されるのですが、軽音楽部の活動と、学外で活動するいわゆる「高校生バンド」とは似て非なるものです。軽音楽部はバンドが集まってできているのではなく、部活動の中で部員がバンドに分かれて活動していくものです。部活動という小さな集団活動の規律がある中で、バンドという小さなチームを組んで音楽

でいく可能性もあります。

自主自律と生徒主導の部活動へ

しかし、逆説的にいえば歴史が浅いからこそ、慣例や固定観念に囚われることなく時代に合った部活動像が描けるのだとも思います。軽音楽部は、少人数のバンドに分かれた活動がメインなため、自主自律の精神や責任感が強く身につきます。自ら考え、自ら動くところが高校生時代にバンドを組む最大の「学び」となります。軽音楽部2.0の最大のポイントは、生徒の自主自律：すなわち、顧問や周囲の大人の関わり方ともいえます。顧問やコーチに「教わる」のではなく、自分たちでトライ&エラーを繰り返しながら部や演奏をまとめていくことが学びの最も大事なステップです。

軽音楽部の黎明期には、全国の音楽経験のある顧問の先生方のマンパワーが最大の推進力となりました。しかし、大きく成長した現在の軽音楽部において、技術的な指導などに深く関わっている顧問の先生方ばかりではありません。顧問の強いリーダーシップから生徒主導の部活動へと移行することが、軽音楽部2.0のテーマでもあります。

例えば、基本的に下級生の指導は上級生が行う、部としての活動が薄くならないようにミーティングや連絡会などを多く設ける、問題はできるだけ自分たちで解決する…といった、部活動の原点に戻った活動ができる土壌が軽音楽部にはあります。顧問は部のプロデュースに徹し、

を作り上げること、音楽を通じた仲間との交流や自己表現などを学ぶことが軽音楽部の主旨です。もちろん、他の部活動同様、テクニクや知識、楽曲創作やアンサンブルのノウハウといった指導を受けられることも大きなメリットです。

また、学年や性別などに関係なくバンドを組めること、表現したいスタイルが選べることも軽音楽部の多様性を表しています。バンド活動、楽曲創作、楽器や歌唱のテクニク向上、音響、照明、イベント制作…など、自分が重きをおきたい活動への選択肢が多いのも軽音楽部の特徴です。

軽音楽部が抱える課題

一方で、よりよき歩きの軽音楽部には今後に向けた課題もあります。各地で独自の発展を遂げてきた軽音楽部は、現在1つにまとめることが難しい状態です。統一されたレギュレーションや審査基準がないまま各地で大会が開催され、部活動とし

運営自体は生徒が行うシステム作りが軽音楽部の今後の発展につながります。

軽音楽部が見据えるべき未来

新たなフェーズを迎えた軽音楽部の発展は、部活動の在り方というミクロな視点と、全国高文連での専門部設置や部活動に見合う統一されたレギュレーションに則った大会の開催といったマクロな視点があります。その両方で大事になってくるのが、外部委託と世間の理解です。当協会に問い合わせが多く寄せられているのは、バンド経験や楽器経験がない先生方からの指導方法です。我々は、できることなら専門的なことは外部指導員や地域に任せ、部員たちで運営できるシステム作りをお勧めしています。そして、そこに辿り着くまでは我々のような外部団体のサポートも有効だとお伝えしています。

機材の進化もともなう、軽音楽部の活動はレコーディング、SNSへの配信、DTM、お祭りや施設への慰問といった地域との交流などと広がりを見せています。軽音楽部はすなわちバンドだろ、という先入観を捨てれば、部活動として、人間教育として機能できるものだと理解していただけたらと思います。

軽音楽部2.0は、まず我々大人が古いイメージをアップデートさせ、理解を深めていくことから始めるのだと思います。この記事をご覧の皆様、機会があればぜひ一度、軽音楽部の演奏会や大会へ足をお運びください。

文・辻 伸介



ての規則や方向性も様々です。当然ながら、それが多様性であり独自性といえるわけですが、学校の部活動として今後機能していくためには、統括する組織の待望論も聞こえてきます。現在、高文連の軽音楽専門部が設置されている都道府県は19です。他に、軽音楽連盟が設立されている県もありますが、軽音楽部はまだまだ全国規模というわけではありません。

そんな中で、主に都市部では高校生バンドを対象とした民間の大会やイベントが増えていきます。軽音楽の普及や高校生への支援と謳ってはいるものの、前述したように部活動の軽音楽部と高校生バンドの区別が曖昧になっていることが多く見られます。働き方改革や地域移行の観点からも民間による大会自体は必要ですが、注意しないと部活動としての崩壊を招きかねません。ポップ

カルチャーを部活動とするゆえの危険性ともいえますが、一歩間違えば築き上げてきた信用が脆くも崩れ去ることになります。

また、ポピュラーミュージックを指導できる人材の不足も大きな問題です。教員の働き方改革や地域移行とも関わるこちらもテーマですが、歴史の浅い軽音楽部では何を教え、何を学ばせるのかも曖昧です。例えば指導員や大会の審査員を頼もうと思っても、単なる高校生バンドの集まりと部活動であることの違いを理解している人でなければ、間違った方向へ進ん

学校教育の視座

組織的に生徒の発表の場を準備する高文連のような組織が、今後益々必要になる

高校生活での部活動と顧問の役割

森崎忠彦

愛知県高等学校文化連盟前事務局長

愛知県教育委員会に出向後、教頭時代に2年、退職後に8年と、10年に渡り愛知県高文連事務局長を勤められ、「コロナ禍の中、軽音楽専門部設立に尽力された森崎先生に、部活動や軽音楽部の過去・現在・未来についてのお話を伺いました。

高校生活はただの3年間じゃない

― 学業と部活動とのバランスとは…
森崎…比率として1対1が良いとか、2対1、1対2…とかは、個人個人で違うと思うのですが、1対0、あるいは0対1は推奨できません。部活動の持つ意味は、学校生活において大きいものがあります。教員として「学業があつての部活動」でなければいけないと思つていますが、1対0、すなわち部活動をしないということが高校生活の充実につながることはないと思います。同じ志し…という大袈裟ですが、同じ方向を向いている他クラス、他学年の生徒と交わりながら何か活動することはとても大切です。現代は動

画サイトなどで技術的なことは学べたり、1人でできることもたくさんありますが、やはり学校生活の中で他の生徒と何かを極めていくという経験が、将来のために大事なのだと思います。

― 高校生活の中の部活動の意義とは…

森崎…まず言えるのは、部活動とは生徒の人間形成において非常に重要で、かつ間違いなく大きな役割を果たすということとです。校長時代、入学式や卒業式の式辞で口癖のように「高校生活はただの3年間じゃない」と言つていました。大人は誰もが実感していると思いますが、例えば90歳で天寿をまつとうした方にとって、高校の3年間は単に30分の1の重みじゃないですよ。10分の1やそれ以上のウエイトを占めているんじゃないかと思つてます。多くの生徒の3年間を横で見てもビックリするほどです。その最たるものが部活動だと思つてます。具体的な例で言うとわかりやすいかもしれませんが、

例えば高校に入つて始めたラグビーでも、3年間部活動で励んだおかげでラグビーの有名大学に行くほど成長した生徒もいます。日本音楽の琴なども同様で、自宅で習得することがほぼ不可能といつていい技能でさえ、部活動で身につけることができるケースもたくさんあります。部活動は、高校生活の3年間をより有意義にしてくれる、非常に大きな存在だと思います。

きちんとした活動を積み上げるしかない

― 高文連の中の軽音楽部について…

森崎…昔の「ロックは不良」「エレキギターを持つていること自体が悪」のようなイメージが愛知県では消え去るのが遅いと感じていて、そういった風土の中では軽音楽部の活動はなかなか難しいと思つてます。学校関係者の中にも少なからずいるのはもちろん、地域の方々にもその影響が強く残つているなと感じることが随所

にあります。江南市の学校長時代に、青年会議所の方だったと思うのですが、カウントダウンコンサートをするので大晦日の深夜に演奏してくれるバンドを紹介して欲しいというお話をいただいたことがありました。その方はバンドは昼間演奏しちゃダメだという考え方をお持ちで(笑)、もちろんお断りしたんですが強く印象に残つてます。

― 状況は変わってきていますか…

森崎…軽音協さんと顧問の先生方が愛知県で連盟(愛知県高等学校軽音楽連盟)を立ち上げられて、令和3〜4年度を中心に、その力を土台にして愛知県高文連に軽音楽専門部を設置しました。コロナ禍でしたが、かなり早いスピードで設置できたと思つてます。しかし、設置審査会の時には休憩スペースなどで立ち話をすると、若い方でも愛知県での設置に対して懸念される方もいました。これは作つてしまつて、きちんとした活動をして軽音楽部の意義を知ってもらえるよう

に実績を積み上げていくしかないかなと感じました。それは、当時も今も強く思つています。

地域移行や地域指導者への委託には限界がある

― 軽音楽を部活動で行うことには、生徒の人間形成としても大きな意味があると思つていますが…

森崎…昔からのイメージから脱却しきれない方が多い要因の1つとして、学校における部活動の位置付けがはっきりしていないとか、安定的でないことに大きく関わりがあると思つてます。戦後に新制高校ができた時は、部活動は選択科目の1つだったんです。それが昭和35年頃からカリキュラムの外に飛び出してしまつて、部活動は必ずしもしなければならないものではないけれども、誰しもがその大きな意義を認めている…という、綱渡り的なやり方を続けてきた歴史があります。それを今現在、どういった形に変えていくことが良いのか問われているのだと思つてます。

― 教員の働き方改革の中での部活動顧問の役割とは…

森崎…昔から思つていのですが、「顧問」という言い方も変ですよね。一般的には何の決定権もない「アドバイザー」という意味なはずなんです。引率中のケガなども含めて責任が非常に重いです。このアンバランスさも部活動の位置付けを不明確にしている大きな理由だと思います。個人的には「地域

移行」「地域指導者への委託」といったやり方には限界があると思つてます。例えば、その分野のスキルが高い方でも、対高校生という点に関しては失礼ながらまったく素人と言つてもいい方がほとんどだと思つてます。声の掛け方だけでも人間関係のトラブルは絶えないだろうと想像します。学校が部活動と関わりを絶つというのは、幻想であり不可能であると思つてます。しかし、その一方で、やれる人あるいはやりたい人だけで部活動を運営していくという発想の転換は必要になってくるでしょう。愛知県の私学の吹奏楽部で一部始まりかけているんですが、学校同士のネットワークを作り上げ、指導できる顧問が他校の生徒の面倒もみるといった体制を作ることにも有効だと思つてます。事故などがあつた時の心配はありませんけど。

三重県研究大会を全国軽音楽専門部設置の起爆剤に

― 軽音楽専門部の設置の経緯は…

森崎…未加盟の私学に対する高文連への加盟促進活動でいろいろな学校をまわつていていた時に、どの学校でも異口同音に開口一番、「軽音楽とダンスの専門部はありますか?」と聞かれました。そんな時期に軽音協さんとの接点ができ始め、設置に動き始めたという経緯があります。軽音楽専門部設置が直接の理由となつて加盟してもらえ学校も増えました。

― 令和6年には12月に全国高文連の研究

大会が三重県で行われます…
森崎…研究大会は、主管県が中心となつて地域ブロックで分科会を運営するという慣わしになってるので、軽音楽専門部の華々しいデビューの有効な機会にしたいと思つてました。現在、軽音協さんにもワークショップを行つていただくようお願いしています。研究紀要の原稿や実践発表の内容もすでにほぼ固まつていますので、必ず良いものになると楽しみにしています。三重県大会が、全国高文連の軽音楽専門部設置の起爆剤にもなりうると思つてます。

― 最後に一言メッセージを…
森崎…先日亡くなられた漫画家の鳥山明さんは、私が最初に赴任した起工業高校(現・二宮起工科高校)の卒業生なんです。在学中の彼が漫画同好会を作ろうとした際、誰も顧問になつてくれなかつたというエピソードが残っています。50年ほど前には、漫画文化はそれぐらいの受け取られ方をしていたのだと思つてますが、漫画文化の現状を見ればまさに隔世の感があります。軽音楽部という部活動についても、かなり認知度は上がつてきました。さらにその存在感を高めていってほしいと思つてます。今後の高文連は、学校と関係者、業者などをつなぐミドルマネジメント的な職務に軸足を移していくべきだと私は考えています。そのことを通して、10年後に予定されている全国総文祭愛知大会が成功裡に運営されることを強く願っています。

インタビュー／文・辻伸介



学校教育の視座

高等学校における部活動は主体性と協働性、やり抜く力を育成する最適な教育活動である

生徒主体で行う部活動 で得られるもの

羽佐田透一
愛知県高等学校文化連盟事務局長

羽佐田透一
大学院時のアジア放浪の旅を経て、1990年に愛知県立高校の教員になる。県教育委員会勤務6年、教頭8年、校長7年を務め、愛知県立安城高等学校長を最後に退職。2024年4月から愛知県高等学校文化連盟の事務局長を務める。

愛知県では、2022年（令和4年）度から愛知県高等学校文化連盟に軽音楽専門部が設立され、これまで以上に「部活動としての軽音楽部」の在り方が注目を集め、また、今後の隆盛が期待されています。そこで、今回は愛知県高等学校文化連盟の羽佐田透一事務局長に高等学校における部活動の意義や活動を通じて得られるもの、今後の方向性などについて伺いました。

●運動部のご出身とのことですが、文化部への印象などはいかがですか？

羽佐田…今年度から愛知県高等学校文化連盟の事務局長として、高校生の文化活動の振興に携わることになりました。きっかけは平成14（2002）年に愛知県教育委員会の生涯学習課に入り、文化振興担当になったことです。そこから愛知県高等学校文化連盟（以下、高文連）との関わりが始まり、アートフェスタ愛知県高等学校総合文化祭（以下、アートフェスタ）を中心に高校生の文化活動の振興に従事しています。アートフェスタ

を初めて観た時に「こんなに生き生きと、活発に活動しているんだ！」という目からウロコが落ちるような驚きがあったことをよく覚えていますが。文化部の生徒たちが発するパワーに大きく感動しました。

●部活動の存在意義や役割と地域移行の真意とは？

羽佐田…部活動は、社会で活躍するのに必須である「主体性」と「協働性」、さらに「やり抜く力」を育成する、最適な教育活動であると考えています。それらは、もちろん学習活動でも育成できるのですし、特に近年重視されている主体的・対話的で深い学びでは、知識・技能、思考力・判断力・表現力とともに主体性や協働性を育成することも目的とされています。しかし、自分の好きなことを自ら進んで、仲間とともに取り組む部活動とでは、その後への影響力が違うと考えています。体育祭や文化祭などの学校行事でも同様の効果があると思うのですが、卒業後に高校時代を振り返った際、授業

内容と部活動や学校行事の思い出のどちらが記憶に残っているのかを考えても、その違いは明白ではないでしょうか。

実際のところ、地域移行は中学校では進んでいますが、高校では、まだ進んでいません。ただ、私は地域移行というか、そこで狙いとされている、顧問となる教員の負担の軽減や、中学校ほどではないですが、高校でも部員数が減ってしまいがちなので、そのために、地域移行という制度が出てきたのは理解しています。

しかし、外へ出ていくと、実際に中学校の校長から受けた相談として「指導者がいないので、高校の顧問に指導者をやってくれないか？」とか「会場として、高校の体育館を貸してくれないか？」という話があり、指導者や実施場所の問題がクリアになっていない印象です。

また、家庭にとっても、生徒にとっても、移動時間や練習場所への交通費の問題など、部活動の地域移行はメリットばかりではありません。そういった諸課題を二つ二つ

励まし合いながら、最後まで努力を続ける関係性が求められます。

それは、何も特別なことではなくて、教育活動の一環であることを意識して行われている部活動では、普通に実現できていることだと考えています。私が勤務してきた高校でも多くの部で実現できていましたし、アートフェスタに参加している部でも、そのことを実感しています。

●大会至上主義や行き過ぎた指導が問題になりますが、部活動の意義を考慮すると、どんな方向に進むのが望ましいのでしょうか？

羽佐田…前提として、私は「勝つこと」をすべて否定するつもりはありません。勝つことで達成感が得られ、自己肯定感が高まるし、練習への意欲も高まるからです。ただ、結果だけを求めすぎると、主体性や協働性などの育成にはつながりません。ましてや、体罰に象徴されるような指導者からの強制による勝利の場合、マイナスでしかありません。

ですので、生徒主体の活動であることは、部活動で最低限求められることだと考えています。その上で、大会や発表の場に向けて、自ら進んで仲間とともに努力を続けることが大切です。そして、大会で思うような結果が得られなくても、部員同士で振り返りを行い、改善を図ることに大きな意義があると思います。また、大会以外にも他校との交流や講習の場も生徒同士が刺激し合い、高め合う機会としても貴重であると思います。

クリアしていかないと、せつかくの制度もうまくいかないのかな…と考えています。

●専門知識や経験のない教員が顧問に就く場合もありますが、顧問の先生に専門知識はどこまで必要でしょうか？

羽佐田…当然、専門知識や経験は、あった方が良いでしょう。専門的な知識や経験を持った顧問が生徒の主体的な活動をサポートできれば、効果的な活動をすることができるとは思います。しかし、顧問が自分の専門知識や経験を過信して、それを生徒へ一方的に教え込むようなことになれば、それは逆効果だと考えています。その場合、ある程度までは部活動を「強く」できるかもしれませんが、先述の主体性や協働性の育成という点ではマイナスです。

言い換えると、顧問の先生に専門的な知識や経験がなくても、先輩から後輩へ教えるとか、生徒自身が調べたり、外部の講習会などに出かけたりして、専門的な知識や技術を身に付けることが大切です。そういう機会づくりをサポートする

●軽音楽部の顧問の先生方に一言エールをお願いします

羽佐田…一言では、まとめられませんが…（笑）。軽音楽部は、生徒に人気があつて、部員数も多く、今後の更なる発展が期待されている専門部の一つです。高文連未加盟校でも軽音楽部がある学校が多く、軽音楽専門部の発展が高文連全体の発展につながることも期待しています。

実際のところ、今年度のアートフェスタにおいて「舞台部門」のオープニングアクトを愛知県立半田高等学校のフォークソング部が担当し、会場を大いに盛り上げてくれて、華々しく開幕することができました。来場者のアンケートでも「カッコ良くて、最高だった」とか「素晴らしい演奏で、感動した」など、非常に高い評価を受けました。

一方で、軽音楽部に対して、今でも厳しい目があることも事実です。服装なども増えて、軽音楽専門部も発展できると思います。それは、そんなに難しいことではなくて、顧問の皆さんが教育活動の一環であることを意識して、部活動としての軽音楽部の活動を生徒主体で行っていたら、十分に可能であると考えています。顧問の皆さんの活躍に大いに期待していますし、軽音楽専門部の発展も祈念しています。

インタビュー・三谷佳之



のが、顧問にとって必要なことだと考えています。また、顧問の先生も生徒と一緒に参加して、ともに専門的な知識や技術を高めていければ、それも素敵なことではないでしょうか。

羽佐田…繰り返しになりますが、主体性や協働性、やり抜く力などが育成されるような活動ができれば、大いに役立つと思います。それらは、社会で活躍するために必要不可欠な資質です。そのためには、生徒主体の活動であること。挨拶やルール、マナーなどの集団としての規律を守ることで、生徒同士で助け合い、

学校教育の視座

部活動は仲間と様々なことを考え、行動し、学び、成長できる、かけがえのない時間である

心を一つに仲間と取り 組む素敵な活動

村松正敏

愛知県立瀬戸工科高等学校校長
愛知県高等学校文化連盟軽音楽専門部会長

村松正敏

1971年愛知県豊川市生まれ。企業勤務、愛知県立工業高校実習教員を経て、2002年愛知県立工業高校の工業科教諭として採用され、今年度、愛知県立瀬戸工科高等学校校長の職と愛知県高等学校文化連盟軽音楽専門部会長の任に就いている。

愛知県では、2020年（令和2年）に愛知県高等学校軽音楽連盟が立ち上がり、2022年（令和4年）に愛知県高等学校文化連盟軽音楽専門部が設立されました。2017年から続く「愛知県高等学校軽音楽大会」も15回を超え、回を重ねるごとに盛り上がりを見せています。そこで、今回は愛知県立瀬戸工科高等学校の村松正敏校長に高等学校における部活動の意義や活動を通じて得られるもの、目指すべき軽音楽部の在り方について伺いました。

●村松先生の顧問歴を教えてください
村松：バスケットボール部の顧問歴が一番長く、豊川工業高校で7年、起工業高校で6年、一宮工業高校で8年、佐織工業高校で4年と、計25年間務めました。そのうち、監督に就任したのは起工業高校に在任していた6年間です。他にも、豊川工業高校では計算技術部の顧問をやっていたほか、一宮工業高校では学科主任を務めながら、電気部の顧問でもありました。佐織工業高校でも、

電子工学研究部の顧問をやりながらバスケットボール部の顧問も務めるなど、多忙な日々を送っていたのを覚えています。

●部活動の存在意義や役割は、どういったものがあるのでしょうか？

村松：私の話になりますが、中学生の頃にコンピュータに興味を持つようになり、父が先見の明で、コンピュータを買い揃えてくれたんです。コンピュータでゲームを楽しみながら、プログラミングをすることも楽しくなり、独学ですが、少しずつ詳しくなりました。ただ、これは当時、勝手に感じていたことなのですが、コンピュータをやっている人間は「根暗（ネクラ）」（今でいう陰キャ）と思われていました。そこで、自宅ではプログラミングを楽しんでいて、学校では勉強をしながら、「運動部に所属したい」という思いを強く抱いていました。今にして思えば、運動部に所属したら「根明（ネアカ）」ではないし、「根暗（陰キャ）」が悪いわけでもなく、間違っていた偏見を当時

の私は思いっきり持っていました。

当時は「文武両道であるべき」と考えていたので、中学では剣道部に、高校ではバスケットボール部に所属しました。大会で優勝したり、華々しく活躍するなど、何か結果を残せたわけではありませんが、剣道部で礼儀や姿勢、挨拶、所作などについて学び、バスケットボール部でも仲間と過ごし、練習に明け暮れていたのは、とても良い思い出です。剣道部でもバスケットボール部でも、顧問の先生は、その道の専門家ではなかったですが、一生懸命に生徒たちのことを考えて動いてくれていたので、感謝の気持ちでいっぱいでした。時には、部員同士で喧嘩になることもありましたが、「うまくならない」「試合で勝ちたい」という気持ちは同じだったので、言いたいことを言いつつ、最後には認め合い、許し合う心を持ちながら活動していたように思います。これは普段の教室（授業）では、なかなか経験できるものではなく、部活動だからこそ得られたことの1つです。

●顧問にとって、専門的な知識はどのくらい必要でしょうか？

村松：私は、あまり専門的な知識がない顧問のもとで学生時代を過ごしました。その道に詳しくて、熱心に指導してくれる先生がいたら良かったな...と思いますし、もし巡り会えていたら、嬉しかったですでしょう。とはいえ、どんな先生であつても、顧問になつてくれなかったら、部活動は存在しなかったかもしれません。ですので、専門性があつた方が嬉しいですが、「そうでなければダメだ」ということは論じるものではないと考えています。

●部活動での経験は将来、どのように生徒の役に立つでしょうか？

村松：直接的に役に立つものがあるか？という点、その道のプロフェッショナルになつたり、部活動で得た経験や知識を専門の分野でも活用できるのであれば、明確なものが挙げられると思いますが、

私にとってはクラスや学科を越えて、1つの目標に向かって頑張る「気持ち」の部分から得られたものが大きかったです。中学の剣道部では、同じクラスの子がほとんどおらず、他クラスの同級生ばかりでした。かえって、自分の中で切り替えて部活動に臨んでいましたし、違う空間にいる感じがして、楽しかったです。学科にいたっては、私は電子工学科に所属していたのですが、部活動には機械科や

電子機械科、電気科の同級生がいました。まったく違うことを学んでいる子たちと一緒に部活動の時間を共有していたので、感性や思考が異なる同級生と触れ合える「部活動」の存在は大きかったです。それに、当時はそこまで考えていませんでしたが、剣道やバスケットボールを通じて、一生懸命になれたのはもちろん、いろいろなことを考え、行動し、学び、成長できた貴重な時間だったと思います。社会

で役立つだけでなく、間違いなく自分の人生に大きく影響を及ぼしました。時に部活動は顧問の先生に専門性があり、それが強く打ち出されてしまうと、生徒の主体性が欠落してしまうところがあると思います。私が学生の頃もそうでしたが、顧問の先生に指示されるのではなく、自分たちで考え、反省し、必死になつて取り組んだ時間や仲間というのは、かけがえのない財産です。ぜひそういったものも大切にしたいですね。

●大会至上主義や行き過ぎた指導が問題になりますか？

村松：目標というのは、学校や部活動によつて様々です。毎日練習があつて、トレーニングが大変な部活動があれば、活動は週に2日くらいのゆったりペースの部活動もあるでしょう。いずれにせよ、部活動に関しては「自分には合わないな」と感じたら辞めることができます。それによつて学校を退学することにはならない、任意の活動です。そういう選択も含め、生徒自身に主体性がありますし、顧問が強制するものではないはずですが、不条理に肉体的、精神的に追い込んだり、痛めつけることが間違っているのは大前提として、部が掲げた「目標」に向かつて、部員と指導者が一緒に向かつていく...。それが「地区大会で優勝する」という学校があれば、「全国大会優勝を目指す」ところもあるわけで、どこを目指すのかはそれぞれだと思います。何事も「やり過ぎ」は良くありませんが、双方が納得した目標であれば、それに向かつてみ

んなが頑張ることが大切ではないでしょうか。そこには、必ず「心（気持ち）」がないといけません。みんなの心があれば、次のステップやステージがありますし、その先につながっていくと考えています。

●軽音楽部の顧問の先生方にエールをお願いします

村松：生徒たちのために日々時間を割いていただき、ありがとうございます。大会で他校の生徒たちを目にすると強く感じるのですが、軽音楽部の生徒たちは、とても熱心なんです。みんなが意見を出し合つて、何度も練習を繰り返して、本番のステージに臨んでいます。本校の生徒も、時には階段に座り込んでそれぞれのパートを練習し、日々練習に明け暮れています。青春を彩っている軽音楽に真剣に取り組んでいる表情や仕草、会話などは本当に素敵です。何かを「突き詰める」というのは根気のいることですが、時間もかかります。ですが、普段の教科学習では得られない経験や時間、仲間をやることのできる部活動です。

顧問の先生におかれましては、時に嬉しく、歯痒く、辛く感じることもあると思いますが、最後には「満足が得られる時間だったな...」という風に感じながら、生徒たちと3年間を過ごしていただきたいと思います。ただ、先生たちも体が資本ですので、休むべき時には休息を忘れずに、これからも生徒たちのことをよろしく願います。



インタビュー：三谷佳之